

玄関のドアを明けると、さわやかな香りが迎えてくれた。花瓶に、タイサンボクの切り花がいけてある。

「子どもは『お母さんのおいがる』と言つてりました」。庄原市西城町の竹延子(たけのこ)さん(82)が大きな白い花を見やり、懐かしんだ。

広島県五日市町皆賀(現広島市佐伯区)にあった広島戦災児育成所。その跡地に立つ障害者施設、市皆賀園のグラウンドの片隅に、タイサンボクは今もある。枝葉を失い、枯れてゆくばかりに見える老木はかつて、育成所のシンボルだった。

「ここで暮らした孤児たち。タイサンボクは、野球やゴム跳びに興じる彼や彼女たちを見守るかのように立っていた。六月になると乳白色の大ぶりの花を付けた。何とも清い香りをはな

# 絆むすんで

③

## 接ぎ木し株分け

一九九五年。施設を建て替える際、伐採の話が持ち上がった。その時、育成所で育った元広島市農協職員の下口輝明さん(71)と安佐北区から数人が接ぎ木をし、株分けすることにした。翌年、育成所出身者や職員ら約百人に配られた。

## 「母」の香り



# 花に重なる愛情の日々

育成所で四九年から一年

間、職員として働いた竹延さんのもとにも株が届いた。その感動を竹延さんは、こう詩に詠んだ。

育成所を創設した山下義

思いをさせたくない。そんな「子」を思う気持ちと、「母」になろうとする努力から自然と、母性が、親子の絆が、生まれるのだらう。「変な言い方ですが、その後交際した男性にも、あんなに献身的な気持ちにはなれなかった」。竹延さんは独身を通してきた。

水無月の光あびて／待ち侘びし泰山木の花は咲きけり／その白き花よ児等の恋うる／母の面影に似て清く香ぐわし

タイサンボクの香りとともに、愛情は子どもたちの心にしみた。株分けを発売した下口さんは若いころ、育成所を辞めた竹延さんを追って呉市の養護施設で一緒に働いた。数年前には、少し老いた「母」の通院のため、広島から毎日のように西城町へと車を走らせた。

そして兵庫県川西市の元音楽教諭島本幸昭さん(71)がメロディーを付けた。関係者の集まりで、皆が口ずかちたりしていると、山下氏

「お母さんへの恩はこれぐらいじゃ返しきれない」。下口さんも照れることなく、竹延さんを母と呼ぶ。

島本さんは育成所にいたころ、竹延さんをお母さんと呼んで慕ったという。竹延さんは当時二十四歳。いい「子」たちに恵まれた。タイサンボクの花と自筆の歌詞を飾った玄関でほほえむ竹延さん (撮影・坂田一造)

成長してから恥ずかしい 献身的な気持ち

(下久保聖司)